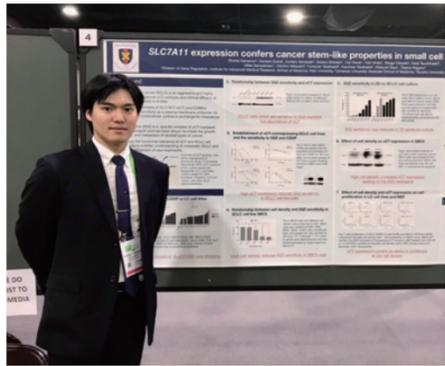


「自由」の中で自ら鍛える 自己実現のための英語力とは

感銘を受けたことはありませんか。何よりも先生方の非常に幅広い知識と教養の深さです。教材の文章を解説する際も、その内容にまで深く踏み込んで、テーマとなつている事象の背景や、そこから派生した出来事など、一つの事柄から縦横無尽に発想を広げて解説してください。その知性の輝きに、こちらの知的好奇心が大いに刺激され、毎回の授業が楽しみでした。

知性の輝きに魅せられ 幅広い教養の必要性を実感

——平岡塾での生活を通して感銘を受けたことはありますか。何よりも先生方の非常に幅広い知識と教養の深さです。教材の文章を解説する際も、その内容にまで深く踏み込んで、テーマとなつている事象の背景や、そこから派生した出来事など、一つの事柄から縦横無尽に発想を広げて解説してください。その知性の輝きに、こちらの知的好奇心が大いに刺激され、毎回の授業が楽しみでした。



アトランタで開催された米国がん学会にて

また、学んだ英語の構造や文法をアウトプットする時間を用意されていたこともありがたかったです。ネイティブの先生の授業では、低学年だと発音と文字の関係やフォニックスと呼ばれる英語学習法から入り、学年が上がるにつれて、文法理解を助ける会話形式の練習になったり、テーマを決めてのフリートークになったりして、「使うための英語」を教えてくれる指導が徹底されていました。そして気がつけば英検1級も取得できていました。

——そうした指導は、大学進学後あるいは現在の業務のどんな場面で役立っていますか。

大学の5年次のとき、新しく「慶應医学部スチューデント・アンバサダー(KSAM)」という制度ができ、その発足メンバーとして活動することになりました。国内外から大学を訪問されるお客様に対して、学内を案内したり大学の魅力を伝えたりする役割を担っています。あるとき、慶應義塾大学医学部が設置している「慶應医学賞」の受賞者を招いてインタビューすることにになりました。受賞理由となつている業績を理解するため、過去に発表された論文にも目を通しますが、英語については平岡塾で培った基礎がありますから、専門分野のことを勉強して内容も理解することがで

きました。また、ネイティブの先生とのコミュニケーション経験のおかげで、インタビューも無事に乗り切ることができました。現在の業務でも英語は不可欠です。診察に必要な情報の多くは海外の論文から得ていますし、診療のガイドラインのほとんどは英語で書かれています。海外の患者さんが来院することも多く、英語でのコミュニケーションを余儀なくされます。外国人の患者さんから「あなた、英語上手だね」と褒められたこともあり、平岡塾で学ばせていただきつくづくよかったです。

腫瘍の専門医として グローバルに活躍したい

——現在のお仕事や将来の抱負について聞かせてください。現在は初期研修医ですので、いろいろな診療科をまわって医師としての基礎を身につけている段階です。初期研修が修了したら、母校の一般・消化器外科で後期研修を行うことになっていきます。将来は腫瘍専門の外科医、特に消化器系のがんの専門医を志しています。消化器外科は、口から十二指腸までの部分を指す上部消化管と、小腸や大腸などの下部消化管に分かれており、さらに肝臓、胆のう、すい臓を扱う「肝胆膵」と呼ばれる部門もあります。私は「肝胆膵」の腫瘍に興味があります。



MD Andersonがんセンターの外來での一コマ



当時の医学部長とKSAM初期メンバー

同時に平岡塾の先生方のように、専門は持ちつつも幅広い教養を身に付けた人になりたいと思っており、専門分野以外の勉強や、医学・医療を離れた分野への興味も持ち続けていきたいと思っています。

——英語が上達する秘訣のよなものはありませんか。

英語を学ぶモチベーションです。中高時代の僕は、海外の人と話してみたい、現地の授業を受けてみたいといったことがモチベーションになっていました。映画を字幕なしで見たいなど何でもいので、自分なりのモチベーションを見つけてほしいと思います。

あと、どんな使うことですか。

日本人はどうしても失敗を恐れるというか、完璧に話せないとしやべらないといったところがあります。しかし、トライ&エラーでどんどん話すことが上達の

のコツです。私も完璧とは言えませんが、コミュニケーションをとりたいという気持ちがあれば、相手には絶対通じると思っています。現在も英語の勉強を続けていますが、それは肝胆膵の腫瘍外科専門医としてグローバルに活躍したいというモチベーションが支えてくれています。

最後に、中高生へのメッセージをお願いします。

中高時代は、将来を決めるタイミングポイントになるような出来事や人との出会いに溢れています。僕も祖父の担当医と出会わなければ、パイロットか外交官になっていたかもしれません。そういうチャンスや、ただ待っているだけではなく自分から積極的に探していくってほしいと思います。勉強ももちろん大事ですが、それ以上にいろいろな経験を通して、視野を広げてほしいと思います。



聖路加国際病院 初期研修医 2年目 亀苔 昌平 さん

より高みをめざすため 英語力とともに 教養を身につけよう

身内の病気をきっかけに医師をめざすようになった亀苔昌平さん。慶應義塾大学医学部時代には、平岡塾で培った英語力を武器に、海外の研究者をもてなすホスト役としても活躍し、米国留学も経験した。初期研修修了後は、腫瘍の専門医をめざして母校で研さんの日々を送るといふ。中高時代のどんな学びが現在につながっているのか聞いた。

風邪のように がんを治したい

——いつごろから医師になりたいと思ったのですか。

物心ついてからははずっとパイロットになりたいと思っていました。飛行機のことなら何でも知っていると言えらるほど、飛行機にのめり込んでいました。中学の途中あたりから外交官もいいなと思いはじめた頃、高校1年生で転機が訪れました。祖父が心臓の病気で入院し、心臓の弁を交換する手術を受けることになったのです。このままでは命も危ないと言われていた祖父を、現在でも元気でいられるほどに快復させてくださった心臓外科医の先生に心底憧れました。同時に、弁を十数年後に交換する必要があると言われ、その弁置換を自分ができるんだと、心臓外科医をめざすことも決意しました。

——以後ずっと心臓外科医をめざしてこられたのですか。

内部進学で慶應義塾大学の医学部に進学してからも、心臓一筋で他の分野にはあまり興味を持っていませんでした。ところが、大学4年次の研究室配属のタイミングで身内ががんになりました。そこでがんの研究室にも興味湧き、腫瘍学の研究室を選んだところ、がんの研究が思った以上に興味深く、やがて「風邪のようにがんを治したい」

と思い始めました。4年次の終わりには、がんの研究室での研究成果を米アトランタの国際学会で発表する機会を得ました。5年次には世界のがん研究のトップを走るMDアンダーソンがんセンターにも1カ月留学させていただきました。世界的ながんの研究や医療に触れたことで、腫瘍専門の外科医になりたいと強く思うようになりました。

英語力を支える文法と 日本語の大切さに気づく

——中高時代はどのような生徒だったのですか。

小学校時代に少しインドネシアに住んでいましたが、日本人学校に通っていたため、全く英語は話せませんでした。ただ、海外の文化に触れた経験から海外留学やホームステイに興味があり、中学受験でもそうしたプログラムのある学校しか受験しませんでした。慶應義塾中等部に進み、海外のサマースクールやホームステイプログラムなどに積極的に参加するようにしていました。英語もそれなりに興味を持って勉強しており、近所の英会話教室に通ったこともありました。

——平岡塾にはどのようなきっかけで通うようになったのですか。

英語の勉強は、英検をバロメーターに独学で勉強しており、英

語塾にはあまり興味がありませんでした。ところが、英検2級までは順調に取れていたのに、準1級がなかなか取れません。文章の構造が複雑になり、単語を知っているだけでは内容が理解できないのです。そこで初めて文法の大切さを実感しました。そんなときに平岡塾に通っていた友人から、文法をしっかり教えてくれる塾だと勧められ、高校1年生になる直前から通い始めました。

——平岡塾の印象はいかがでしたか。

英語の文法を基礎から教えてくださるのは当たり前のですが、母語つまり日本語をものごく大切にしている印象を受けました。現在の日本の英語教育は、単に流暢に話せばいいと、どんどん英語教育を開始する年齢を早める方向に向かっていくように感じます。ところが平岡塾では、母語がしっかりしている方が外国語の力も伸びるという考え方に基づいており、日本語の指導も同じくらい厳しいものがありました。訳文でも美しい日本語を求められたり、日本語の論理性についても細かく指摘されたりします。「テスト的にはそれで正解かもしれないが、でも日本語の文章としてはどうか」というアドバイスを常にいただきました。現在、研修医の日常業務でカルテや紹介状